

第2分科会  
自主活動  
第2分散会

I はじめに

分散会基調では、討議課題をもとに3つの討議の柱を提案した。それぞれのレポートがどの柱に該当するのかわかることを確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－⑥

対話を通して育まれた共生の心(徳島県人教)

－主な質疑と意見－

奈良・神奈川 Bが苦手なことを伝えようとしたときのBの保護者とのかわり具合はどうだったか。

報告者 Bが弱点を見せる授業について、Bの保護者とは相談をしていない。

島根 6年生の学級に入っているが、支援学級の子どもが交流学級の子どもたちとトラブルをおこしている。支援学級担任との連携が大切だ。

報告者 Bではなく、交流学級の子どもたちが変わらないといけないと考え、なかまづくりに取り組んだ。支援に入るT2の先生がBさんばかりかまって私たちにもかまってほしいという声もあった。

大阪 Aさんが劇的に変わった原因は何か。子どもにまかせるのは紙一重だと思うが、どういうふうに取り組んだのか。

報告者 6年生を担任してすぐ、4・5年生でのBへの不満を、Aをはじめたくさんの子どもたちから聞いた。それが傾聴を大切にしたいきっかけだ。Aは週に2・3回、私に話しかけてくるが、傾聴と対話をずっと続けた。自分のなかでは、特別変わったことをしてきていない。普通なことをしてきただけで、どうしてAが劇的に変わったのか見切れていない。また、6年生は学校行事などを企画運営することが多いので、行動する前には学級会で話し合い活動をして、子どもたちの意見を大切に、子どもたちが納得した上で行動した。

協力者 報告者の人権観を報告の最初に話していたが、AやBと日頃から小さな対話を続けてきたその様子を周りの子どもたちも見ている。そのなかで一番気になるAやBと先生がつながってきて、学級会活動で学級のみんなもつながっていったのではないかなと思う。そのあたりをこの討議で話し合ってみよう。

福岡 子どもたちの変容がすごい。特別支援学級を初めて担任したとき、その子どもが神楽やおみこしなどに興味をもっていることを話してくれた。宗教の関係でみこしを担いだことがないことがわかり、保護者と話をしたら「お祭りとしたらいい」と言ってくれた。地域の保存会の方に来てもらい、「ぼくと同じように祭りに参加できない園児がいたら担がせてあげたい」とサマーフェスティバルにみこしを作った。雨で実現しなかったが、交流学級の子どもたちといっしょに担ぐことで周りの子どもにその子の思いを共感させることができた。

大阪 人権教育は、いかに土を耕すか、日頃から対話を続けること、「Aさんはどうしたい？」と問い直すことに価値がある。中学3年生の文化祭で「Cといっしょにダンスする」と生徒たちが言ってきて、できるかなと教師の方が迷った。生徒たちは「教えるしCはダンス好きだからできるよ」と言って、生徒の力でダンスを成功させた。子どもにまかせることの大切さを感じた。

大阪 過干渉する中で子どもどうしの関係を壊してしまっていないか。家族が地域で育ててほしいという願いで入学してきた発語の少ない1年生がいた。子どもどうしトラブルもあったが、その子が手を挙げて発表したとき、「Dはどう言ってたと思う？」と問い返し、「Dは〇〇と言ってると思う」と周りの子どもたちが考えるようにしていった。4年生になって、周りの子どもたちがDを通して学んでいる。

横浜 やまゆり事件から10年、一昨日もしょうがいのある方の話を聞いてきた。教育のできることを、いっしょに学ぶことの大切さを改めて感じた。Aが「Bとかかわる時間が短かったからだ」と言ったことが答えだ。

徳島(報告者の学校長) 6年生は学習発表会で二皮むけた。私の学校では、おとなからの一方通行ではなく子どもの対話(傾聴)を大切に、子どもが自分で決める力をつけることができるよう、全ての子どもの担任として接してほしいと教職員にお願いし、学校の組織力を大切にしている。特に報告者は子どもの受容範囲が広い。

徳島 新学期の出会い、いわゆる「黄金の三日間」で今までの先生の取組、クラスの課題を観察して見抜いて、傾聴することを大切にしたいのがすごい。

徳島(報告者は)特別なことをした覚えはないと言っているが、朝から夕方まで授業や休み時間を過ごす子どもたちとの対話の中で、子どもたちの人権を大切にする営みは、学校づくりにつながっている。若いときすばらしい管理職と出会い、その先生は「安全、安心がある学校をみんなで作っていかないとけない」と言われていた。

報告者 3月にAが「先生って変わってるよな」と話しかけてきた。「Aさんがそう思ってるんならそうかなあ」と答えたら、「そういうことよ。普通、そんなこと言われたら怒る」とAが言ったのを思い出した。

## —報告2—⑦

### 差別とたたかってきたまち

～変わるような気がする～(大阪府人連)

#### —主な質疑と意見—

**香川** 周りの教員の協力体制, 周りの子どもたちの変容はどうか。

**報告者** 本校に4年前転勤してきた。当時は, 学校の課題として部落問題学習に取り組む体制が十分ではなかった。ここでの取組が部落問題を解決していく上で大切と考え, 八尾の地域の団体に協力してもらい, なかまとともに, 部落問題に対してみんなで取組を始めた。次に, 周りの子どもの変容については, Aが一人であることについて, 周りの子は「なんで一緒に学ばないの」とAにせまっていた。そんな周りに対して, 自分らしさを出せなかった A。部落問題学習を積み重ねていくなかで, 子どもたちに対して, 「自分らしさってなんやろ, 誰にも尊重される生きた方ってあるよね」とせまった。自分のくらしや生き方と重ね, 学びを深めていくなかで, 少しずつAが一人であるということについて否定的な言葉を言う人も減ってきた。次第に, 「じゃあ一緒に何かすることあったら言ってね」と, 周りの子たちが A の生き方を尊重するように変容していった。具体的にAにべったり寄り添うなかまがいたわけではなく, Aの生き方を尊重する。Aもひとりで過ごすことを孤独とは感じておらず, Aの“ひとり”の意味が変わってきた。

**香川** Aの変わるきっかけとなった取組は。

**報告者** 教科書無償運動などの教材ではAには響かなかった。自主教材「わたしたちのまちのもうひとつの歴史」から, 被差別部落の人の思いなど, 地元の事実を伝え, そこでたくましく生きる人の姿をAが知るなど, 今, 目の前にある社会の課題を考えることで, Aは「人って変われることができるのでは」と考えるようになった。

**滋賀** 報告者の葛藤や変容は。

**報告者** 取組を始めても, 全然Aに伝わらない。やってもやっても, Aにはなかなか響かなかった。ただ, 周りの子は少しずつやっぱり差別とかおかしいと気づいてくれた。なかなかAには, 届かなかったけど, 周りの子の変容が自分を支えてくれた。Aにどうしたら響くかを一緒に考えてくれた同僚もいた。だから諦めないで取り組めた。学級には, なかなか思いを出し切れない子もたくさんいる。そんな子も, 自分らしさにどう出会えるかやと思っている。「どうしたい? どう思ってるん?」と問いかけたい。その中で, 少しでも困っている子の思いを聞き取り, 次につないでいきたい。

**大阪** 差別をなくしていくための自主活動をどう広げていったらいいか悩んでいる。たまに自分が実践している取組が, 子どもにとって同調圧力となり, 一つの考えを子どもたちに押し付けているのではないかと感じてしまう。Aをどんな思いで反差別集会につないでいったのかを教えてください。

**報告者** 自分が教師になったタイミングでたまたま

自分自身も反差別集会にであっている。自分は奈良で育って, 部落問題学習にも出会いがあったが, 本質をとらえていない中学生だった。それが社会に出て, 仕事をし出して, 今の部落差別にであって, 子どもたちに何ができるのかが変わっていった。少しでもくさびを打っていけば, 一年後, 二年後とその先に, 先生と学んだ学習はこういうことだと伝わるのではと考えている。自主活動とのつながりは, 反差別集会が立ち上がった 2003 年。そのとき, 自分はある中学校で講師をしていて, 集会にかかわった経験がある。だからこそ, 反差別集会の立ち上げのときを知ってるし, その中で, どのようなかまがつながっているかも知っていたので, Aがこの場にいけば, 何か通じるものがあるのではないかと考えた。そこで, Aに「行ってみてはどうか」と提案した。

**福岡** 原稿にかけないくらいの思いが報告者にあったのではないか。見えそうで, 見えていないところにせまっている大切さを報告から学ぶことができた。今日の報告をするまでに, いろんな葛藤があったと思うが, 自分を出して報告してくれた。

**徳島** Aを信じてまっていたところがあるのではと思う。報告者の思いを教えてください。

**報告者** 自分のなかでのゴールがあって, Aを含めて差別をなくすためのなかまになることがゴール。そのゴールに向けてだったら, すべてが過程。今のAも高校生やけどまだ過程であって, ゴールさえぶれなかつたら, あたたく待つことができる。なかなかAには届かなかった3年間やけど, 最後の最後にすこし, Aの心に響いたのではと思っている。全国からこのようにたくさんの人が集まってきて, 報告を聞いていただき, いろんな意見を返してくれた。また頑張れそうな気持ちになった。しっかり2日間学んで帰りたい。

### III 総括討論(1日目)

**香川** 初めて全人教に参加した。今, 人権学習に取り組みながら, まだまだ苦手だと感じている自分がいる。今日のレポートや討論を聞き, 日々の生活や学級経営が人権学習とつながっていると気づいた。子どもたちの意見を傾聴することもなかなかできていないが, 週明けからしっかり子どもたちの意見を聞いて, 人権学習も楽しく実践していきたい。

**大阪** 大阪の報告に心動かされた。徳島の報告からは, 傾聴の大切さを感じた。2つの報告と自分の実践をつなげて話したい。2人の報告者は, 子どもを信じて任せていた。信じて任せることがAの変容につながったのではないかと考える。子どもとの関係をしっかり築いてきたから, タイミングを見逃さず, 後押しできたのではないか。その子どもを見取ることの大切さに改めて気づいた。今, 本校では部落問題学習を進めていくうえで, 家庭訪問はとても大事で, その子たちが通っている地域のセンターでの子どもの姿を見取することも大事だと考えて

いる。学校だけの一面の姿では子どものことは分からない。学校の取組として、学期ごとに、教職員で気になる子どもを見つめることを実践している。愛媛 参加して同じ志をもっているなかまがたくさんいることに、励まされ、あたたかい気持ちになった。2人の実践を聞いて、どのようにしたら人権学習の学びが深まるかについて悩んでいる。

報告者(大阪) 人権課題について学習するときは、熱くなりすぎず、フラットに思いを伝えることを大事にしている。「今の社会から差別をなくしたい。そんな社会を創りたいと思っているが、私一人では変えられない。だからみんなと一緒に考え、みんなの思いを聞きたい。」と投げ返すようにしている。そこで出てきた子どもたちの悩みや思いを「じゃあ、どうする？何ができる？」と問い返し、実践している。深めていくというより、子どもたちと一緒に学んでいくことを大切にしている。

報告者(徳島) 昨年度初めて6年生の担当となり、ハンセン病の学習にも取り組んだ。知識を学びながら、子どもとのやりとりのなかで、子どもたちから、学習発表会で人権劇をしたいと言い出した。台本も子どもたちが考え、進められたことはよかった。

三重 2本のレポートで、保護者とどう関わったのかを聞きたい。学校で見せるAさんの姿のわけはどこにあるのか。どこで見つけようとするのか。そうすると、家庭での様子が気になってくる。そのようなことを思い巡らせることが大切であると考えている。Aの生い立ちはどうか、また保護者の様子や保護者の生い立ちまで見ていくことが大事であると考えている。先ほど、フロアから出た「学習の深まり」については、私は、「この子にこのことを言わせたい」ということが定まっていなくて深まらない。その定めを決めるうえでも、その子にどう関わるか、その子の姿を、家庭を含めていろんなところから見ていくのが、大切ではと考えている。

報告者(大阪) Aの保護者には、当初、変わらない周りの友だちの姿を知るなかで、「あの子はあるな子だからうちの子とは関わってほしくない」「新しい環境になれば、Aにも、気の合うなかまが見つかるから、それまでだまっておけばいい」「Aが学校に行くのが嫌なら、学校に行かせない」との思いがあった。Aと関わるなかで、Aが変われば、保護者の思いも変わるのではと考え、Aを中心に据えた取組を進めた。もちろん保護者の思いを聞くために家庭訪問を重ねた。人権学習を積み重ねるなかで変わってきたAを見て、トラブルを乗り越えようとするAを後押ししてくれる保護者の姿があった。保護者の思いも丁寧にくみ取りながら、この子たちをどうしたいかを問い続けながら実践を積み重ねたい。

報告者(徳島) Aは保護者に認めてもらいたいという気持ちは強かった。認められたい気持ちが、学校で強く出ているのではと感じていた。保護者とのつながりについては、自分もどのようにつくっていけばよいか悩んでいる。

三重 この話を聞いて、子どものよみ方がずいぶん変わった。保護者にどうやって踏み込んでいったらよいかは、若い先生には難しさもある。本校では、経験のある先輩教師やスクールソーシャルワーカーに助言をもらっている。

三重 保護者とつながるためには、よいことだけでなく悪かった行動についても、こういう思いで指導しているということを伝えることが信頼を生むと考えている。また、伊賀市の実践では、学期ごとに、人権の成果と課題や気になる子の課題を出し合い、教職員で共有して、子どもへの関わりを見つめるなどの取組を進めて学びあっている。教員同士で取組を広げていくこともポイントであると思う。

滋賀 保護者とのつながりは明日も議論してほしい。今日の報告を聞いて、学校をこえた反差別的ななかまづくりは、単に、なかよしや好き嫌いではなく、ともに生きるなかまとして、差別がある社会を変えていく取組を、なかまとつながりながら進めていくということを、今日の報告や討論をとおして確認できた。

熊本 報告を聞いて、子どもに教える前に自分自身はどうなのか。自分の部落問題との出会い、もし部落差別とであったとき、どう向き合うのか、そして出会い直しを大切にしたい。

報告者(大阪) この会は自主活動の分科会であり、反差別的ななかまづくりをどう進めてきたかが大事であると考えている。Aは今高1になっていて、今年も反差別集会に参加したいと言っている。その場に、高校の新しいなかまを連れてきてくれたら素敵だなと思っている。この課題を解決するなかまに私もなりたいたいし、その子にもなってほしいし、またその周りの人も増えてほしいし、何かできることはないかと考えて、日々取り組んでいる。

### －報告3－⑤

「つらそうな雰囲気だったから、ギョツとした。」

(熊本県人教)

### －主な質疑と意見－

兵庫 学習会や南部ブロックの位置づけや参加者の人数、各学校での扱いなどを教えてほしい。

報告者 熊本市にあった7つの学習会を1つにまとめた。7つの主催者は教職員、運動体、行政とさまざまだった。今は市の人権担当者、主任が運営をしている。サービスは各学校によって違う。小中高の子どもが場を同じにする時間が30分ある。参加者は現在小学校9名、高校2名。おとなは20名の担当者がいるが、参加できていない人も多い。南部ブロックは熊本県南部の学習会の集まり、県全体の集まりもある。

香川 私立の高校は地域とつながっているというイメージがない。報告者が長い間、地域とつながり続けてきた原動力や覚悟はどこにあるのか。学校の他の職員の取り組み状況はどうなのか。

**報告者** 教員に採用されたのが通信制だったので、目の前の子どもと向き合う大切さを学んだ。私立の高校の担当者が21名いて、月1回はフィールドワークなどの研修で学んでいる。地域の方と交流もしている。学校では以前担当されていた方の理解はある。今年は担当を外れたが、ボランティアで参加している。

**福岡** 高校生が学校をやめたいと相談できる場があり、大事だと思う。他の高校生の反応はどうだったか。該当生徒の高校の先生との連携はあったか。

**報告者** たつや(仮名)がやめるときは後輩のゆうき(仮名)がフォローをしていた。その1年後にゆうきがやめたいといった時、たつやが家に行って話をしてくれた。そして学習会でも、自分のことを振りかえって「高校生活の2年間は無駄じゃなかった。将来何がしたいかを考えるきっかけになった」と話をしてくれた。その話を小中学生も聞いている。

**奈良** 地域の学習会に多くの先生方に参加してほしいが、なかなか伝わらない。強制はしたくないが、参加してくれた先生は、子どもを見たり、地域の方の話を聞いたりすることで意識が高まっていくことがわかる。出会いは必要だと思う。

**報告者** 学習会に来ている子どものクラス担任には学習会の次の日に内容を報告し、興味があったら来てくださいとお願いしている。私学でのなかまづくりはできてきている。学校には行けていないけど学習会には参加している子どももいる。そんな子どもの様子がわかる夜の学習会に参加してほしい。昼の研修の参加率は高いが、昼よりも夜の学習会に参加してほしい。勤務時間外でもあるので管理職の理解も必要。

**福岡** 報告者の夜の学習会にもっと参加してほしいという気持ちに共感した。各学年1名は参加してくれているのでありがたいが、やはり子どもたちは担任の先生を待っている。参加することで、学校で見える姿と学習会で見える姿が違うことがわかる。学習会のなかまは小学校からの付き合いなので、生活を知っている。学習会の方が、本音が出しやすい場になっている。だからこそ、家庭訪問が大事だと思う。以前から、職員会議より家庭訪問が大事だと言われてきた。家庭訪問には、定期的な家庭訪問、何か問題があった時の家庭訪問、何でもないときの家庭訪問の3種類あって、一番大事だと思うのは何でもない家庭訪問。若い先生は何を話したらいいかわからないと言っているので、心配なら一緒に行くよと声掛けし、組織として動いている。

**報告者** 何でもない家庭訪問や何でもない会話は大切だと思う。それで信頼関係が築け、安心につながる。

**熊本** 私の子どもが私学の高校に通っていた。中学校で不登校になったが、1時間もかけて家庭訪問に何度も来てくれた。私学の先生が頑張っているのを見て今後も応援したい。

**大阪** 地域に学習会があるのは意義深い。ただ差別をなくすためには困っている人たちだけが語る

のではなく、困っている人に周りが気づくことが大事。高校をやめようと思った生徒の学校の先生やクラスメイトはどう思っていたのかという点に不安をもった。やはり、学校やクラスでつながりを持ちなかまづくりをして、課題解決をしていくことが大事だと思う。

#### －報告4－⑤

「ひとりで抱え込まなくていいんだよ」

～人権フィールドワークの活動をとおして～

(三重県人教)

#### －主な質疑と意見－

**兵庫** 外国にルーツがある生徒の交流会について、人権サークルの位置付けについて、Aの日本語能力について(意見を書けるか、文章化できるか)教えてほしい。兵庫では多文化研があり、私が事務局長、会長は現職の校長がしているが、三重ではどうか。

**報告者** コロナ前はあったが、今は、三重県の高校生が参加できる「人権まなびの交流会」「松坂地区人権サークル交流会」などに参加している。人権サークルは15名の希望者で部活動として行っている。Aは小1のとき日本に来て、日本語ができ、タガログ語は聞けるが話せない。

**三重** 三重県では人権教育連絡会の会長を、元三重県人権教育課長で現松坂商業高校の校長がしている。人権サークルは全ての高校にある。校長が会長をして、校長会の中に協力者をつくって人権教育を進めることが大切だと思う。Aは、フィリピンにルーツがあるが、見た目はわからない。人権サークルを活躍の場にすれば、居場所になると考えていた。

**大分** 自分の思いを語ることは大切だ。先週、教師自身がAと自分のつらさを重ね、教師自身の思いを綴っているが、Aに教師の思いを語ったのか。

**福岡** 元中学校教員だが、中2の担任のとき、中国にルーツをもち、日本語がわからない生徒が入ってきた。中国残留孤児だから日本に帰り、ずっと日本で暮らしていくことを選択した家族だ。生徒たちが通訳をして日本の学校に慣れていった。生徒どうしのつながりがつくれて、本当にいい学級学年づくりができたなあと満足していた。しかし、日本語がわからなくて卒業し、今、父が病気になって、一週間前に中国にもどって父の治療をしてまた日本にもどってくるという話を聞いた。中3で進路について自分を語る授業を行ったとき、その生徒が「二つの笑顔」の話をした。一つはうれしいときや楽しいときの笑顔、もう一つはどうしようかわからないときの笑顔という話で、その話を聞いたとき、毎日笑顔で登校してきていたのは、本当の笑顔だったのか、そこを見ていたのか自分を反省した。その生徒を通して、自分の生徒たちを見る目をもう一度考えさせてもらった。報告者は、自分の生い立ちに向

き合ったとき、自分の両親に語っているのか。それを語ったとき、両親からはどんな返しがあったのか。**報告者** 以前、人権サークルで「子どもの人権」について語り合う場面では、「子どものとき、長い髪にしたかったこと、スカートをはきたかったことを母に伝える権利がある」ということを子どもたちに話をしたが、先週のことはまだ語り合う場面をもてていない。このレポートは両親の前で読んで練習し、母は「ごめんね」と泣きながら聞いてくれた。また、「あのころ義母との関係で、あなたのしたいことをさせてあげられなくてごめんね」と返してくれたし、子どものときからそういった話をずっとして、今もそういう関係にある。父は、母伝いに「私は納得していない」というのを聞いていたが、直接話ではできていない。

**大分** 外国にルーツをもつ生徒に、英語、中国語、日本語がわかるが、自分の思いを日本語で言えるかどうかアセスメントして確認している。日本語を話すことができても、進学や就職に、思いを伝えるレベルまでの日本語能力が必要だと思う。アセスメントができる専門家がいれば、そこも必要だと感じている。また、私の母も大変な苦勞をしてきた。それが当たり前の時代だった。自分が苦しい立場だと、マイノリティの人に感情移入して共感すぎてしまい、失敗してしまった経験がある。「寄り添う」、「感情移入する」を区別して接する必要があると思う。

**福岡** 「一番言いたくないことは、一番わかってほしいこと」で、なかまづくりは、一人でも二人でもそうした思いが話し合えるなかまでないといけない。反貧困学習について教えてほしい。

**報告者** 貧困のスパイラル、社会構造に目を向ける。例えば、日雇い労働者にこそ保険が必要なのにないとか、ひとり親家庭に養育費が払われない場合があるが、外国では国が保障しているとか、カードローンでさらに借金が増えてしまうとかの学習内容である。また、福祉と行政の学習では、Aは奨学金などのお金で進学できること、Bは教育の力の大切さを学んでいる。

### Ⅲ 総括討論(2日目)

**福岡** いまだに在日の教え子は運転免許証を落とし、本名から自分が在日朝鮮人とばれて、差別されるのではないかと不安をもって生活している。知らない人の中で生活するとはそういうことだと言っていた。昔、部落研の子が差別をした生徒に対して「この子を差別をなくすなかまにしないといけん」と言っていたのを思い出した。

**奈良** 部落出身教職員の会として「地区がないから部落問題学習をしなくてよいのではないか」と言った管理職への指導を県教委にお願いしている。子ども会では、同じ空間で学ぶことができる。自分自身を振り返り、子どもの自立にもつながる。報告を聞いて傾聴の大切さを再認識した。子どもが安心

して過ごせる場になる。

**兵庫** 自主活動の1つとして部活動にも教育的効果がある。卒業してもつながるなかまづくりは大切。しんどい思いを語ることは難しい。無理して語らなくても卒業してからでもいい。聞くだけでもいいと思う。

**福岡** ヘイトスピーチをする人たちは小中高校でどんな出会いをしてきたのか。この人たちは学校教育が生んだ差別の被害者。私たちは差別をなくすなかまときちんと出会わせなければいけない。

**報告者(三重)** ウトロ平和祈念館に研修に行った際、地区に住むおばあさんが2021年の放火事件を起こした22歳の青年について「かわいそうな青年や。1度でもここに来てくれたら、おいしいものを腹いっぱい食べさせてあげられたのに。そうすればあんな犯罪起こさずに済んだのに」と言っていたことを思い出す。

**長崎** おとなの自主活動、なかまづくりも必要。教職員も人権学習で構える方が多い。自分は担当者として出会える場が多い。他の先生方も出会い直しができればいい。

**香川** 幼稚園の担当。乳幼児期の愛着形成がとても大切、人を信用できる人間に育つ。小さいときにできていなくてもその後の出会いで取り戻せる。「自立とは夢を語って人を頼ること」ととても共感する。熊本の学習会会長が「まず自分の家庭を大切に」と言ったことも大事だと思う。

**三重** 自分の小学校のクラス担任は過半数が25歳以下なので、人権学習を、担当者を中心にじっくりと構築している。研修では地域の方との連携を大事にしている。また、自己的人権意識を振り返り、自分の生き方と重ねて人権学習をするようになった。

**奈良** 最近2つの出会いがあった。1つ目は人権を考える会でウトロ地区に行ったこと。2つ目はおじいちゃんが差別者だったこと。部落の人から「タバコに火をつけて」と言われ自分のタバコに火をつけその人の足元に投げたことがあった。それに対し父がとても怒っていたことを父が亡くなった後、母から聞いた。生きているうちにもっと父と話がしたかった。このような親の差別行動や差別発言に対し、違和感を持ったり、反論できるようになったりするには教育の力が必要。子どもころにプラスの出会いをさせたい。

**大分** 初めての参加。報告者の熱い気持ちがよく伝わってきて参加できてよかった。玖珠町には地域の方と語る対話会がある。何度も参加するうちに気張らず話ができるようになった。対話することの大切さを学んだ。これから生徒と関わる中で、差別をなくしていこうという立場で熱をもって伝えていきたい。

**大阪** 自主活動とは何かと小学校の教員として考えた時、まずは行動すること。しんどい立場にいるなかまを支えていく理解できるなかまづくりが大事。それをつくるおとなは、差別を学ぶこと、正しく

知ることが大事。大阪市では地域の方と一緒に教材を作る取り組みができています。報告者と同じで、当事者という言葉が嫌い。被差別の立場にいる人が当事者ではなく、差別をなくしていこうとするみんなが当事者だと思っている。子どもたちに行動しなさいと言うんだったら、自分も行動していきたい。

**京都** 人権担当者2年目。周りの教職員に自分が学んだことを伝えること、巻き込むことが大事だと思うができず悩んでいる。広めていく工夫はないか？

**報告者(熊本)** 自分自身がいろんな先生とコミュニケーションをとって、話を聞いてもらう信頼関係づくりをすること。私学の担当者とは連携がうまくできている。

**報告者(大阪)** 前任校は担当者として地区の方や保護者とよく関わっていた。担当が外れてもその経験を活かし、自分に何ができるのかを考えることができた。悩んでいることや使命感を持っていることはよいこと。今の答えにならないが、次の立場になったときにどうしていくかを考えてほしい。そうすれば人権学習は広がっていく。

**報告者(三重)** 高校現場でもなかなか思いが伝わらず、もどかしいことも多い。しかし、高校は社会に出る前段階であり、差別をなくすためにどうやってなかまをつくっていくかを考えて、もっと頑張っていきたいと思っている。研修では自分の1年間で学んだことを報告する場があり、自分の学びや思いが伝わり、研修に来てよかったと思ってもらえるように意識して取り組んでいる。

**熊本** 自分が思っている教員の仕事は周りの人をプロデュースすること。反差別のなかまづくりはやはり、クラスのなかまづくりからスタートするもの。子どもたちにそんな思いになってもらう前におとながそうあるべき。自分の学校では最初の職員会議で自分を語ることをしている。最初は、自立とは自分で何でもすることと考えていたが、今は、困ったときに誰かに頼ることと捉えている。なかまづくりは、自立に向けての取り組みだと思う。

**大阪** 自分の学校の校区には地区がないが、ないからこそ学んでいかなければいけない。当事者が誰なのかというと、差別される側やマイノリティではなく、差別する側、マジョリティこそが当事者ではないか。自分がしてきたなかまづくりは、自分のクラスだけがよければいいという考えでやってきたのではないかと反省している。今では、思いやりや優しさだけでは差別はなくならないと思っている。今後の新しい取り組みとして人権サークルを立ち上げたいと考えている。

**福岡** 最近の報告は自分の生き方を重ねて書いている人が少なかったが、今日は報告者の生き方が聞けて、一生懸命に取り組んでいる様子が見て取れた。今日は持って帰るものが多くて参加してよかった。